**平成３０年度　第２回学術講演会のご案内**

**日本大学松戸歯学部　障害者歯科学講座**

**伊藤　政之　先生**

◇日時：平成３０年７月１４日（土）午後７時～９時

◇会場：高松市歯科救急医療センター

**◇演題：『 自閉症スペクトラムのある人の**

**歯科治療への思いと実践 』**

【抄録】

　「自閉症のある人の歯科治療に入る前に考えていること」というテーマで、2015年の障害者歯科学会で教育講演をさせて頂きました。当歯科医師会の三谷先生も出席されておられたとのことで、当時を振り返り次のような感想を頂きました。「ご講演の始めに言われた『その人を理解して診療に導く』という言葉にハッと致しました。当時まだ障害者歯科の研修を始めたばかりで、私自身の勉強の視点が『技法の習得』に向いておりました。患者様方の心の内側で起こっている事に目をむけて、それを理解できるための勉強が必要であり、『人を診る』視点は一般診療でも通じるが、発達障害では、より注意深く専門的な知識をもって診ることが必要である、という勉強の方向性を学びました。」

　私の訥々とした話の中から、よくもこのような感想を頂けるとは思っておらず、大変うれしく思いました。先生は、岡山大学の江草先生のもとへ足繁く通われ、実践され、障害者歯科学会の認定医の受験資格が得られたとお聞きしました。認定医となることは、臨床実践のための指標になるでしょうし、それを告知することで障害のある方たちが歯科医療を受ける際の一つの目安になると思います。当然患者さんからの期待も高まります。しかし、ある患者さんから、「学会ＨＰから探

した認定医の先生が近くにおられるから受診希望を伝えたら、端からうちでは診ることができない。」と、断られたという話も一方では聞きます。

　障害のある方たちに限らず歯科医療は、「いつでも、どこでも、誰でも、近くの歯医者さんで受

診できる」ことが大事だと思います。そこには、認定医であろうがなかろうが、「本当に、私を（わが子を）診てくれる歯医者さん」を望まれているのだと思います。

　私が入学した昭和50年頃、日大松戸歯学部を含め、障害者歯科学教室（講座）のある歯学部は

数校しかなく、また障害者歯科学の講義も現在のように一般的ではなく、小児歯科学の一部で講義されていた、または、受講したこともないという話を聞いた覚えがあります。香川県歯科医師会の障害者歯科診療相談・協力医に登録している会員数は、高松で約20名おられるそうですが、多く

の若い皆さんは大学で受講された経験があると思います。会員の先生方はNormalizationの流れから「障害のある方を診るのは当たり前」、そして、「次の一歩」を踏み出すために「診療相談・協力医」として準備をされていることと思います。それが、「本当に、私を（わが子を）診てくれる歯医者さん」となる土台になると思います。

　障害者歯科学教室に入局当時、恩師 上原 進先生の講義を学部学生と一緒に受講していました。最初に「温故知新」と黒板に書かれ、どの学問でも「歴史を知ることで次世代へ繋がっていく」ことの大切さを説かれ、「最初に歴史が書かれている本を購入しなさい」と、言われました。

　障害者歯科学総論から始まり、各論へ。1971年、J. Weymanが“the dentally handicappedchild”の問題を提起し、その後1974年、L.A.Foxが“Grab bag”として８つの“trics”を紹介したことで、障害のある人たちでも歯科治療ができる、その対応を知ることができました。

　大切なのは、先ず、“Tender Loving Care (T.L.C.)”が挙げられていることです。自分自身が

興味があるところは“behavior modification”でした。学生当時、麻酔科の授業では「無意識か

ら有意識へのダイナミックさ」を教わりましたが、私は「有意識の状態でその人の（意識を変えて）行動を変える」ほうがよりダイナミックだと感じました。

　尊敬する、高校の先輩でもある大江健三郎氏は、1988年、リハビリテーション世界会議の基調

講演で「障害の受容」を中心に、息子の光さんの話もされました（自立と共生を語る，三輪書店，

1994.）。光さん自身のみならず、彼に関わってきた方たちに対して“decent”という形容をされ

ました。この意味は、「恢復する家族」で「人間らしく寛容でユーモラスでもあり信頼にたる」と紹介されています。ここに、“T.L.C.”をオーバーラップさせることができるのでないかと思います。自閉症のある人の歯科治療の根本は、その中には必ずそれぞれの手段に至る過程に「人間らしく寛容でユーモラスでもあり信頼にたる（T.L.C.）」の態度や感情が含有され、また、すべての治療手技を機能分析してみれば、例え全身麻酔であれ、その前後は、“behavior modification”を用いつつ、その態度・感情が実践されているのではないかと思います。知識レベルから実践での体得は、経験を通して具現化されますが、自分にとっては長い年月が必要でした。治療の方法はマニュアル化できるかもしれませんが、一人ひとりへの対応は千差万別です。患者さんを受け入れる中で見えるもの、見えなくてもあるもの、それを見なくてはならない難しさ。しかし、これまでそのモチベーションが続いているのは、それほど、意識下での歯科治療は深く、面白く、楽しく、魅力的だからです。

　三谷先生は、「高松市歯科医師会の会員の先生方は、自分の医院での診療の他、学校歯科医として、また地域での健康教育や、これからの地域包括ケアシステムにからんで色々な職種の方と同席したり連携する場面に携わります。」と言われ、「私自身を含め、この全員が障害歯科診療に１次医療機関として機能できているわけではないのが実態です。自分自身、通法で私ができることはまだまだ少なく、自閉症患者様について心の中で起こっていることをもっと理解することができて、

かかりつけ歯科医として対応できる範囲を広げたい、と思っております。また、会員の先生方に

も、身近な事として感じて頂き、少しでも臨床で対応していただけるようになって頂ければと思います。」と、将来への思いが私には伝わってきました。皆様はどうでしょうか？

　現在、センターの原田先生を中心に、徳島大学から数名の先生が応援に来られ、会員の先生も参加されておられると聞きます。障害者歯科学の理論と実践は両輪ですが、まだまだ自分自身が専門的な知識に乏しく、理論的な背景を持とうと探しあぐねており、そのような背景での経験から、考え方や実践の何かを上手く伝えられるかどうか分かりません。それでも、今回の講演がセンターの資源、地域の資源を活用して自閉症スペクトラムのある方たちの診療を、躊躇することなくどう取り組めばよいか、取り組みを模索している「診療相談・協力医」の皆さんやスタッフの皆さんの「本当に、私を（わが子を）診てくれる歯医者さん」に繋がる、実践のヒントになれば幸いです。

【略歴】

1955（昭和30）　愛媛県伊予郡砥部町　生まれ

1975（昭和50）　日本大学松戸歯学部　入学

1981（昭和56）　日本大学松戸歯学部　卒業

研究生（障害者歯科学教室）入学

　　1991（平成 3）　日本大学　専任講師

　　　　　　　　　　　　　 　現在に至る

　　千葉県立香取特別支援学校　学校歯科医

　　千葉県立佐原病院特殊歯科　非常勤医師

【学会・研究会】

　　日本障害者歯科学会　代議員、認定医

　　日本自閉症スペクトラム学会　自閉症スペクトラム支援士（Expert）、評議員、編集委員

　　日本発達障害学会

　　日本行動分析学会

　　臨床実践の現象学会

質的心理学会

千葉県ティーチプログラム研究会

都情研有志による事例研究会

ＳＣＥＲＴＳ研究会

　　障がい児・者の医療を考える会　がじゅまる　ＳＶ

　　香取海匝地域療育システムづくり検討会　委員

　　松戸療育・自立支援研究会　事務局長

　　ＮＰＯ法人子ども子育て・発達支援研究会　理事

【社会貢献】

　　柏市保健衛生審議会母子保健専門分科会　委員（H20.11 - H22.6）

　　松戸市障害者計画（平成25年～32年）策定委員会　委員長（H24.5 - H25.3）

　　社会福祉法人青葉会　評議員（H.27）

　　柏市発達障害者支援協議会　世話人副代表

　　千葉県特別支援教育振興大会　感謝状（H.27）

**※参加ご希望の方は、下記にご記入の上、６月３０日（土）までに高歯事務局宛にＦＡＸにて**

**お申し込み下さいますようお願いいたします。**

**（高松市歯科医師会 ＦＡＸ：０８７－８５１－１１２０）**

学術講演会　参加者名簿 （平成３０年７月１４日・土） 午後７時～９時

　　 所属先：

|  |  |
| --- | --- |
| ご氏名 | ご氏名 |
|  |  |
|  |  |
|  |  |
| 合　計 　 　　 名 | |